

寄稿1

『地方創生』に向けた 札幌大学のチャレンジ

Vol.3 asir (アシリ) -アイヌ文化のスペシャリスト
を育てる-



札幌大学
教授 本田 優子 氏

はじめに

2022年度、札幌大学では「みらい志向プログラム」を創設しました（前号参照）。3つのプログラムの一つが、「アイヌ文化スペシャリスト養成プログラム asir」です。asir（アシリ）とは、「新しい」という意味。大ヒットマンガ『ゴールデンカムイ』に登場するアシリパさんは「新しい年」という意味の名前を持ち、作中、自らを新しい時代のアイヌ女性なのだと言っています。本プログラムも、アイヌ文化教育の新たなステージを目指すという気概を込めたネーミングです。

そもそも札幌大学には、萩中美枝先生（1927～2021、知里真志保夫人）による講義など、アイヌ文化教育の歴史がありました。さらに2010年に、ウレシパ奨学金制度を核とするウレシパ・プロジェクトが創設されたことにより、アイヌ民族の若者たちが数多く進学するとともに、同プロジェクトの推進母体である一般社団法人札幌大学ウレシパクラブでアイヌ文化を熱心に学ぶ学生たちが増加しました。

とはいえ当初は、4年間学ぶ過程で「アイヌ文化の

プロフェッショナル」として生きていきたいと願う若者が育っても、卒業後の受け皿はほんのわずかしかなかった。しかし、2020年に民族共生象徴空間「ウポポイ」が開設されたことにより、多くの若者たちがアイヌ文化の継承・発信者として活躍できるようになりました。また、社会の様々な分野でアイヌ文化への関心が高まり、専門的知識を有する人材が必要とされるようにもなってきました。

このような状況の中、本学ではさらなる教育研究の深化と国内外へ向けた理解促進の取り組みを推進するために、2020年12月、「札幌大学アイヌ文化教育研究センター」を設立しました。さらに2022年1月には、ウポポイを運営する公益財団法人アイヌ民族文化財団との連携協力協定を締結しました。これは、両法人が連携及び協力することによって、それぞれの強みを生かしてアイヌ文化の一層の復興と発展を図り、アイヌ民族の誇りが尊重される社会の実現に寄与することを目的としています。協定に基づき、ウポポイにおける札幌大学の実務研修生受け入れや、相互の講師派遣など様々な形での連携が図られることとなりました。

以上のような一連の環境整備が進む中で、asirは創設されました。プログラムの詳細については後述しますが、とりわけ注目していただきたいのは、実技演習科目「アイヌ工芸」です。アイヌ工芸A I^{ししゅう}は刺繍などの布工芸、A IIは編み工芸、アイヌ工芸B Iは木彫、B IIは伝統楽器トンコリの制作です。このようなアイヌ工芸の実技演習を導入し正規授業として単位化したのは、4年制大学では初の試みと言えます。この画期的な取り組みの講師として、アイヌ民族文化財団職員である北嶋イサイカ*1さん、山道ムカラさんをお迎えすることができたのは、前述の連携協力協定締結の大きな成果と言えます。

以下、アイヌ民族文化財団理事長の常本照樹氏と、アイヌ工芸A I・A IIの講師を務める北嶋イサイカさんに、asirについて語っていただきます。

*1 北嶋さんのイサイカ、山道さんのムカラは、ともにボンレと呼ばれるアイヌ語のニックネームである。イサイカは易しい、ムカラは山刀の意味。ウポポイのスタッフはすべてアイヌ語のボンレを持ち、日常的に使用している。

1 asir開設によせて



公益財団法人アイヌ民族文化財団
理事長(札幌大学特別客員教授)
常本 照樹 氏

公益財団法人アイヌ民族文化財団では、アイヌ文化振興事業を推進するとともに、民族共生象徴空間（ウポポイ）の管理運営にあたるため多くの職員が働いており、アイヌ及びアイヌ文化に関する理解と経験を有する職員を継続的に確保することが肝要です。また、これらの事業を実効的に遂行するためにはアイヌをはじめとする先住民族に関する専門的知見が欠かせません。これらのことから、当財団は関連分野の研究者や教育課程を有する大学との連携を重視しており、とりわけ札幌大学とは連携協力協定を締結し、学生を実務研修生として受け入れたり、ウポポイ職員を講師として派遣するなどの活動を行っています。

札幌大学が全学生に開かれた教育プログラムとしてasirを開設したことは、アイヌに関心を持つ学生の裾野を広げるという意味においても意義深いことであり、アイヌ文化の振興に関わろうという意欲を持つ学生が輩出されることを期待しています。



公益財団法人アイヌ民族文化財団
国立アイヌ民族博物館 学芸主査
北嶋 イサイカ 氏

筆者はウレシバ奨学生として札幌大学に入学し、アイヌの歴史や文化を学び、それと同時期に学外で津田命子氏からモノ造りの技術を習い、2014年に卒業しました。何ヶ所かのアイヌ関連施設に就職し、現在は国立アイヌ民族博物館で学芸員として働いています。

2022年4月から母校で講師としてアイヌ工芸Aの授

業を行いました。工芸AはAⅠとAⅡに分かれており、授業内容はAⅠがアイヌ刺繍の基本的な3つの技法を学ぶバッグ等の作製、AⅡはプレスレット等でエムシアッ（刀掛帯）の編みを学ぶというものです。エムシアッの編みでは、刺繍よりも難しいと言う作り手が多いが、津田氏から習った技法を生徒に伝えたところ、ほとんどの生徒がプレスレットを編み上げました。今考えると大学の授業ではありますが、津田氏が浦川タレ氏から教わったものを筆者が習い、それを学生に伝えていくという技術伝承の場となりました。この授業を機に技術を磨き知識を深め、技術伝承者やアイヌの物質文化関係の学芸員等が育つことを願っています。

2 asirの概要と実技演習

2-1 概要

本プログラムは6つのパートで構成されます。修了要件を満たすためには、設定された35科目（70単位）の科目群から、必修8科目（16単位）を含む15科目（30単位）以上を修得することが必要です。

① アイヌ語：6科目（12単位）

従来、Ⅰ～Ⅳの4科目だったアイヌ語にⅤ・Ⅵの2科目を増設し、中川裕先生（千葉大学名誉教授）にオンラインで教えていただいています。これにより、途切れることなく系統的にアイヌ語を学ぶことができます。

② アイヌ文化・アイヌ文学：4科目（8単位）

これまでも、現代のアイヌ民族について理解を深めるとともに、伝統的なアイヌ文化について幅広く学ぶ「アイヌ文化論Ⅰ」「アイヌ文化論Ⅱ」「アイヌ文学」などを開講してきましたが、さらに、世界自然遺産に登録され関心が高まっている縄文文化とマッチングさせた「縄文文化とアイヌ文化」を新設しました。

③ アイヌ史・北海道史：6科目（12単位）

「アイヌの歴史」「考古学特講Ⅰ」「考古学特講Ⅱ」「日本北方史」など、考古学や文献史学に基づきアイヌ民族や北海道島の歴史を学びます。

④ 地域・観光：5科目（10単位）

「北海道観光概論」、「観光とSDGs」、「まちづくり経営」、「アントレプレナーシップ論」など、アイヌ文化を観光やまちづくりの側面から考える機会を提供します。

⑤ 実技演習：6科目（12単位）

後述します。

⑥ アクティブ・プログラム：7科目（14単位）

札幌大学ウレシパクラブは当初は学内組織だったのですが、2013年に一般社団法人化し、多くの会員様のご支援をいただきながらアイヌ文化を学び発信してきました。一方、2020年度から学内でアクティブ・プログラムが始まりました。これは正課学習以外で学生たちが自主的に学ぶ活動を単位化する試みであり、ウレシパクラブの活動もアクティブ・プログラムの一つであるウレシパ・プログラムとして単位認定されることになりました。

2-2 実技演習について

前述のように、実技演習の中でも「アイヌ工芸」は、アイヌ民族の工芸を初めて4年制大学の正課授業に導入した画期的な科目と言えます。この授業では理論学習も行いますが、とりわけ実技においては一人一人の進度を確認しつつ細やかな指導を行う必要があるため、各科目の定員を10名に限定しています。以下、科目ごとの特徴についてご説明します。

① アイヌ工芸A



アイヌ工芸A 「編み」の授業の様子

国立アイヌ民族博物館学芸員の北嶋イサイカさんを講師として、春学期に開講しています。刺繍を含む布工芸や編み工芸など、伝統的には女性が担ってきた生活文化領域での理論及びスキルを身に付けますが、現状では受講生の半数は男子学生です。

A I

まずアイヌ文様についての理論学習の後、描き方について学びます。しばしばアイヌ文様は左右対称だと言われ、たとえば文様の半分の型紙を作り、そこから機械的に左右対称の文様を作るという方法もあります。けれども、本授業ではそのような手法は用いず、しつけ糸で方眼を作り、それに基づいて連続性のある文様を全体的に描いていきます*2。文様の基礎を学んだ後、刺繍に入ります。

A II

「編み」の技術を習得します。アイヌ民族の男性が正装した際に装着するエムシアツ（刀さげ帯）には美しい幾何学模様が織り込まれており、高度な制作技術が要求されます。少しでも継承者を増やす目的でアイヌ工芸に組み込みました。最初は編み方の基本を理解するために小ぶりのプレスレットを作成し、次にミニサイズのエムシアツを制作しました。



学生の作品

*2 このような手法に拠る限り完全な左右対称の文様は生まれない。この点については本田も「アイヌ文化論」の授業で次のように語ってきた。「自然界に完全な左右対称は存在しない。人の顔も左半分と右半分は似ているようで違う。ゆらぎとも言えるこの違いが生命体の証であり、完全な左右対象にしてしまうと生命の躍動感や美しさが失われるように思う」。

アイヌ工芸B



アイヌ工芸B 「木彫」の授業の様子

ここでは、木彫や木工など、かつては男性の手仕事と考えられてきた領域について学びますが、今年度は履修者10人のうち4人が女性です。

B I

第1回は本田がアイヌの木彫工芸について概論的に紹介し、第2・3回はアイヌ工芸研究における第一人者、五十嵐聡美氏（北海道立近代美術館）に講義していただきます。第4～6回は、画家の石垣渉氏からデッサンの理論及び実技を学びます。

第7～15回は、ウポポイ職員の山道ムカラさんを講師に迎え、木彫の基本を学んだ上でマキリ（小刀）を制作します。山道さんの卓越した工芸技術は広く知られており、国立アイヌ民族博物館の展示資料の制作にも数多く携わってこられました。

asirでは彫りの技術だけではなく、プロの工芸家に要求される様々なスキルの修得を目指しています。そのため今回制作するマキリの鞘には、アイヌ工芸における重要な材料である桜の皮を用いることになりました。B Iを履修予定の学生たちで6月下旬に平取町二風谷の森に入り、山道さんのご指導のもと桜皮の採取実習を行いました。皮の剥き方のみならず、この時期に限定して皮を剥ぐ理由についても実物を確認しながら理解することができました。

B II

B IIではさらなるスキルアップを目指します。B I

で木彫の基礎を学んでいることを条件とするため、1年遅れで開講します。2023年度は平取町二風谷で合宿形式の集中講義を行い、トンコリ制作の第一人者である高野繁廣氏に教えていただく予定です。

② アイヌデザイン演習

1・2年次でアイヌ文様の基礎を学んだ後、3年次の2024年にはパソコンを用いてアイヌ文様をデザインする方法を学びます。これからの工芸家には必須のスキルと言えます。講師は、アイヌ民族にルーツを持ち幅広い領域で活躍中のデザイナー、石上光太郎氏（阿寒湖出身）にお願いします。

③ アイヌ情報発信演習

最終段階として準備しているのが、情報発信のための学習です。実技で工芸の基礎を身に付け、デザイン演習でPCについて習熟した後に、自らの作品を世に出すためのノウハウを獲得します。そのことにより、eコマースなどインターネット上で作品を販売することも可能となり、工芸家として人生を切り開くための武器となるはずです。

3 アイヌ工芸の現状と後継者育成の必要性

アイヌ民族にとって工芸は存在の根幹に関わるものと言われます。たとえば江戸時代の場所請負制のもとアイヌ民族は過酷な労働や差別的状況に苦しみました。さらに、ロシアの接近を警戒した江戸幕府はアイヌ民族を和風化する政策をとりました。しかしそのような中でも、アイヌ民族は独自の世界観や工芸、芸能など様々な文化を発展させたのです。稠密に彫り込まれた木製品や細やかで洗練された衣服文様は、民族的アイデンティティの発露であるとともに精一杯のレジスタンスだったとも言われます。だからこそアイヌ芸術は、近現代の抑圧された時代においても民族を支え続けたのです。

しかしそのアイヌ工芸は現在、伝承の危機に直面しています。もちろん、ウポポイでは多くの若者たちが業務の一環として携わっており、未来への希望となっ

ていますが、地方においては、二風谷や阿寒湖のように伝統のある地域ですら、工芸を志す若者は決して多くありません。かつて、私の教え子の一人が木彫の道を志すと告げたとき、彼の家族は猛反対しました。「才能がなかったら取り返しがつかない。仮に腕があったとしても木彫りでなんか食べていけるわけがない」と最後まで認めてもらえませんでした。大学在学中に自分の能力と意志を確認する機会を提供したいとの思いが、アイヌ工芸正規授業化に対する私自身のモチベーションとなりました。

また、大学の正規授業となることで社会的威信が高まるということもあります。たとえば沖縄県立芸術大学には琉球芸能専攻や、沖縄独自の紅型びんがた、芭蕉ぼしょうや芋麻からむしなど沖縄特有の自然繊維の加工・織りの技術について学べる工芸専攻などが設置されています。高等教育機関の中に位置づけることで、アイヌ工芸は北海道が誇る伝統工芸としてのポジションを確立することができいくように思います。

さらには、多くの人々が日常的にアイヌ工芸に触れる環境を整備することも、理解の促進や販路拡大のために重要だと考えます。本学の中央玄関ロビーでは、瀧口政満氏の最高傑作といわれるコタンコロカムイ（シマフクロウ）像が学生たちを見守っています。2021年12月にオープンした新棟にあるホワイエには、アイヌ木彫工芸の第一人者である貝澤徹氏が自身の集

大成と評する巨大なアイヌアートモニュメント「タネサスイシリ（昔から今に至るまで）」、圧倒的存在感を放つ藤戸竹喜氏の「狼」や「親子熊」、床ヌプリ氏の「ユーカラクル」、貝澤雪子・美雪氏の見事なアットゥシ（樹皮衣）など、最高峰といえる作品群を展示しています。

おわりに

以上、工芸を中心にasirの意義を述べてきましたが、本プログラムは決して工芸家育成だけを目的としていくわけではありません。アイヌ文化を産業化し、アイヌ民族の経済的自立を促進するための総合的な学びを提供する場です。

今後、アイヌ文化に関する知識は社会の様々な領域で必要とされるでしょう。たとえば、海外では私たちの想像を超えてアイヌ文化への関心が強いと言われ、インバウンド観光におけるアイヌ文化対応は必須です。また、博物館学芸員は当然のこととして、全ての自治体職員が地域に根ざしたアイヌ文化について理解すれば北海道はもっと豊かになります。

かつて一人の学生が言いました。「もともと北海道が大好きだった。でもアイヌ文化を学んだことで、この大地にはアイヌ文化が地下水脈のように流れていることを知り、全く違った姿が見えてきた」。asirは、アイヌ文化を核とする北海道の新たな姿の創出を目指します。



本学新棟のホワイエの様子